

---

# ゆうき

十夜 萌永

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆうき

### 【ZPDF】

Z0373M

### 【作者名】

十夜 萌永

### 【あらすじ】

幼馴染3人全員「ゆうき」

そんな3人が通う学校で殺兎（？）事件が…

「……はあ。」

梅雨。雨が何日も続いて憂鬱だ。紫陽花とか眺めるのは嫌いではないけど。

「どうした。花音ため息なんて、名前と同じくめりめりや似合わねえ。」

「そうだよ。花音ちゃん名前は似合つてるけど、らしくないよ?」

私の左右で私に話しかけるのは、鈴富勇貴と優貴。（どちらもゆつき。）双子。兄妹。二人とも鏡に映したぐらいそっくす。栗色のサラサラな髪とか（長さは違つけど）、平均軽く越す身長とか（しかもモデルに余裕になれるぐらじの）、中身は天と地ぐらい違うけどねつ……。

兄の勇貴は、口が悪くつてシスコン。重度の。自覚はしていない。髪はロン毛だ。邪魔そう。

妹の優貴はおつとりしてて、深窓のお嬢様つて感じ。勇貴はシスコンだけど、優貴は違う。ロングの髪がサラサラなびく。

さて、二人のことが出たし私のことも話そつかな。

私は、結城花音。（花音つて似合わないってことは知ってるわよ……。）中一。髪は赤茶。セミロング。全でが中の上。一人に挟まれてなければ、もう少ししましに見えると思つ。

さて、私たち三人は幼なじみだと言つてこいつと思つ。しかも全員ゆつきだしね。

とにかく、事件は始まる。多分、もう少し先だけど。

学校には少し早めにつくよつに心得ている。特に理由はない。私の教室は二階。席も窓側。下を見ると、水たまりや紫陽花が見える。よい席だと思つ。

「おはよう。結城さん！」

そんないい気分を台無しにするのは、後ろの伊集院夜空。どうも私のことが好きらしい。夜空はないといって読みらしい。伊集院つてこう氣取った名前に夜空でないと読む名前からして氣に入らない。じいつ血体が氣に入らないけど。（下の名前で呼ぶとかねつ…）

「……おはよう。」

同じクラスのよしみで返事をしてやる。

「おお……君に挨拶して貰つただけで一日が明るくなるよ…」

そういうところが氣に入らないんだって分からいかな……。（

もうつたを漢字で書くとかね。）逆に君を見ただけで私は氣分が滅入るよ。本当に。ああ、なんかまだ言つてるよ。

「花音さん！ いつになつたら告白の返事をくれるんだい？」  
何もやらないよ。

「テメエ、花音に話しかけんな！」

ゴンッと良い音がした。伊集院の頭から。

「……痛つ！ 君！ 何をするんだ！」

「るせー！ それに俺は君じゃねえ！ 鈴富勇貴だ！」

どうやら呪いたのは、勇貴だつたらしい。

「ゆうきつて言うのが気に入らないんだ！ 花音さんと一緒にじゃないか！」

「はあ？ ジャあ鈴富の方でよべや！」

「呼びたくないね！ そもそもなんだい君は！ 僕が花音さんと話しきしているのに！ 君も花音さんのことが好きなのかつ！」

「……つバカ！ るさい！」

……よく分かんないけど、勇貴が伊集院を退治してくれてる。

右隣が勇貴。後ろが伊集院。救いは、前の篠山君。普通。後ろと右隣が異常だから、普通な人が少なくとも友好的に感じる。

「おはよ。結城さん。……大変だね。」

苦笑を浮かべて篠山君は言つ。

「おはよ。まあいつものことぢゃない？」

私も苦笑でかえす。紫陽花をみるとピンクだった。紫陽花の色つて  
土で変わるものだっけ？

「大変ね。」

いつも私にそういうのは、一ノ瀬葉月。小柄で華奢な体をして  
る。ショートカットがよく似合つ。

「もう、伊集院と付き合えればー？」

「とんでもないことを言い出した。

「はあ？ 無理！ 無理だから！」

「えー、伊集院も中身はアレだけど、見た目はなかなかだし、金持  
つてんじゃない？ あつ、そつか！ 鈴富兄妹達を見るからか。はー  
ん。」

一人で自己完結した。

てか伊集院あり得ないから。あれだ。地理のテストで、百点と  
るよりないから。真面目に。

「あつ、そういうえば知ってる？ 飼育委員の誰かがうさぎ殺してるつ  
て？」

「何それ！？ 初耳なんだけど！」

私は、文芸部に所属してて小説の題材になりそうなことは、新  
聞部の葉月に教えてもらつてる。

「日に日に、うさぎがいなくなるらしいよー？ 鍵を開けれんの飼育  
委員だけだし。逃がすつてことはないでしょ？ しかもうさぎの遺  
体もないらしいよ？」

「何？ 遺体がない？ いかにもミステリーじゃない！」

私は癖でネタ張に書き込んでいた。

「飼育委員があ……、誰かいたっけ？」

私は小説に事実を書く上でモットーにしているのは、取材に基づい  
た真実を書くこと。

「花音のクラスは、篠山君と佐々岡さんね。ちなみにうちのクラス

は中山君と鈴宮妹ね。」

「優貴が飼育委員かあ……。」

意外でもない。優貴は動物が大好きだし。優貴に聞くか……。

「優貴ちゃんに聞こうとしても無駄よ。勇貴君が伝えないようにしてるんですもの。」

私の考えてることバレた……？てゆーか、勇貴知つてたのか。出たなシスコン。あの野郎。

「仕方ない篠山君に聞くか。」

ガタンと大きな音を立てて花音は立ち上がり、走り出した。

「んつ。なんか分かつたら教えてね。」

葉月はもう見えない、花音にひらつと手を振った。

「おい、一ノ瀬。今の結城花音？すげえ可愛いな。」

「止めときな。あの子は。」

「分かつてるよ。鈴宮勇貴が惚れてんだわ……。見るぐらいで殺されないさ。今話してたの、あれだろ？。つさき失踪事件？まだ知らなかつたの？」

「鈴宮兄に、実は花音と鈴宮妹に言つなつて言わたんだ。あたし。

「……言つちやつて大丈夫か？」

「大丈夫。それにあの子が動いた方が面白くなつうじやない？」

そう言つて、葉月は笑つた。

「篠山君いるー？」

「篠山？いないよ？」

休み時間だし、しかたないか。

「なんで、篠山を探してるんだ？花音？」

いつの間にか、勇貴が目の前に立つていた。

てか勇貴やっぱり、なんだかんだ言つてカッコいいから近くに顔があるとドキドキするんだけど！せめてあと五センチ離れて！

「いやー、あのお、これには訳があつてえ……。」

ドキドキするから、言い訳も変だ！てか正直に話せー！私！

「…………うさぎか？」

ハアーとため息をついた後、勇貴は言つた。でも、距離は変わらない。ヤバい絶対顔赤いよ……。

「葉月のやつ……。」

そう言つて勇貴は頭をかいた。やつと離れてくれたよ。フウー。「ねえ？なんか知らない？そのうさぎについてさ？」

なぜか、勇貴は赤くなつた。なんだ。風邪か。

「お前調べるの止めとけ。てか頼むから。」

「嫌。」

即答。きつぱりと。

勇貴は少し考えて、

「……その代わり、優貴には内緒な？あと危ないことはするなよ？」  
と言つてくれた。出たなシスコン。

「返事は？」

「ラジヤー！」

お母さんかよ！って言いたかつた。

。

私は文芸部。勇貴はバスケ部。優貴はテニス部。三人とも違う。

「！」一んにちはつ！

たてつけの悪いドアを力一杯推す。バスケ部とテニス部はもつと滑らかに開くと思う。

第一資料室が文芸部の部室。第二がないのに第一つてついているのが悲しい。

「今日は、花音ちゃん。」

部長の三年生の斎藤香先輩。大和撫子つて感じ。物語は、純情恋愛モノ。先輩らしい。

部員は私を入れて七人。この学校では、五人から部活が成り立

つ。つまりギリギリ。

「おはよつ。結城君。」

「こんにちはー、川島先輩。」

「こんにちは、花音ちゃん。」

馴れ馴れしく肩を叩こうとして私がスルーしたのは、特に肩書きがない、一年生の宇崎厚先輩。実は私は伊集院よりこの先輩が嫌いだ。私が全教科満点を超えるのが永遠に訪れないようだ。見た目暑苦しいし、ウザいし……。嫌いってオーラ私から出るのが分からぬいかなあ？しかも、私が入部したあとに転部してきて、一回も何も書いてない。そして、毎日生傷が増えたのはなぜだろう。

一方私が挨拶したのは一年生副部長の川島新人先輩。縁なしメガネが良く似合つ。勇貴までいかないがかなりカッコいいと思つ。川島先輩が書く話は、意外にSFだ。

「今日は三人ですか。」

宇崎先輩はいないと考へる。文芸部は好きなときに好きなだけくる、と言つすばらしい伝統がある。

「ええ、昨日は五人だつたわ。」宇崎先輩を抜かして。

「私だけですか、昨日出なかつたの。惜しかつたなあ。」

「あら、花音ちゃん。花音ちゃんは昨日以外先月皆勤賞でしょう？ すごいわよ？」

「そうですかー？」

私は本題に入つた。  
「私と斎藤先輩は最後まで宇崎先輩を無視した。なんか言つてるけど知るか。

「あの、最近飼育小屋から、うさぎが逃げてるじゃないですか？で、噂なんですけどさきは死んじゃつてるんですけど、遺体がなくつて困つてるらしい？とか？」

「……この間聞きたがつていた、この学校のが七不思議話してあげるわ。」

「……花音ちゃん。月をテーマにした僕の小説未発表の読む？」

変だ。明らかに変だ。

そりやあ七不思議知りたいし、小説も気になる。だけど、今はうきぎだ。

「……いいです。勇貴に聞きます。」

だけど、先輩たちを困らす訳にはいかないから、私は大人しくした。

「勇貴のアホーっ！」

窓を開けて叫んだ。

「アホは治んないだろ？が！バカ花音！」

ほら勇貴が出てきた。

私の部屋には窓が二つあって片方は勇貴、片方は優貴の部屋の窓に面している。

勇貴は生優しく呼んでも出ないからいいとするしかない。本当に双子なのかな？

「そつち行きたいんだけど、ハシゴ出して。」

漫畫みたいにヒョイと行ける距離じゃない。現実はハシゴが必要なぐらい離れてる。

「はいはい。お待ち下さい。お姫様。」

勇貴のお姫様は優貴でしうが。めんどくさそうに、ガチャガチャ音を立ててハシゴをこいつにつけた。

「ありがとうございます。」

私はハシゴを渡る。何度もやつてるから慣れた。ひょいと勇貴の部屋に飛び降りた。

「……汚い。」

心の声が。勇貴の部屋は汚い。私の部屋より。優貴は比べものにならないぐらいキレイだ。一卵性なのに遺伝子は違うのかもしない。

「すみませんねー。」

ちよつと怒つたのかもしれない。ここには、可愛い幼なじみだから許してもらおう。さて、本題だ。

「あのさ。うわざの話、先輩達まで口封じしたでしょ？なんで、優貴だけじゃなく私まで聞いちゃいけないのよー。」

「そつそれは、その……、危険だと思ったんだよ！巻き込まれんのが！」

「あつ、そつかー。うさぎ殺しなんて聞いたら、私優貴に伝えちゃって、優貴卒倒しちゃうもんね。」

「やっぱり、シスコンか！」

「なんか、違う……。正しく伝わってない……。」

「何が違うのか分からぬけど。」

バンッと音がした。後ろから。優貴が青い顔してガクガクして

る。私は後ろを見た。

「勇貴？花音ちゃんに伝えたくないのは分かるけど、私まで伝えないよにしないで頂戴？」

優貴は笑つてるけど、目が笑つてない。恐い。それに間違つてる。

優貴は私に気づいて言つた。

「あら、花音ちゃん。来てたの？勇貴になんかされなかつた？」

「まさか、優貴のことが大好きなシスコンの奴に。」

「なんか、勇貴が胸押さえてるよ。むせたか？」

「私だけよ？飼育委員でうさぎ失踪事件知らなかつたの。委員会で恥かいちゃつたじやない？」

「やっぱり？私も知らなかつたの！」

勇貴は笑顔で怒つてる優貴に怯えてる。可哀想だけど。

「で、私言つちゃつた。私が犯人探してぶつ殺します。つて。」

笑顔で言つてる分恐い。

「まさか、本当に殺さないよね？」

恐る恐る聞いてみた。優貴ならやりかねない。意外と護身用に合氣道やってたし。

「やだ、せいぜいぶつ飛ばすだけよ？」

……多分文字通りぶつ飛ばすんだろう。

「でも、私一人じゃ怖いし。勇貴に手伝つてもりおりと想つて。いいよね？」

「……はい。分かりました。」

「返事が遅いつ！」

「はい！」

勇貴は優貴に逆らえないんだ。なんだかんだ言つて。

「はいはいはい！私も犯人探しやりたい！」

私のモットーは取材に基づく事実を書くこと…

「花音ちゃんも？まあ、勇貴がいるし大丈夫か。よし！三人で探してぶつ飛ばしましょう！」

ぶつ飛ばすのは優貴にお任せします。

「花音ちゃん？うさぎ失踪事件ってどこまで知つていてるの？」

「なんか、日に日にうさぎがいなくなつてて、飼育委員が逃がすのはないから殺したんだろうって、葉月が。」

私は葉月から聞いた話を話した。

「花音ちゃん、それにはいくつか違つ点があるわ。……まあ花音ちゃんを思つてのことだと思うけど。事実はこう。一週間前かしら？餌をやりにいったら、うさぎが一匹いなかつたの。不思議に思つたらしこれど子うさぎだつたから、死んじやつたかもしれないと思つたらしいわ。」

うさぎは警戒心が強くて人間が触ると匂いがするから、そのうさぎを仲間外れにするらしい。大人より子うさぎのほうが匂いがつきやすいらしいし。誰かが触つたのかもしれない。

「そして三日後。またいなくなつたの。今度は、血が残つてたんですね。殺されたのはまだ一匹だけど油断ならないわ。」

「……なんで殺したんだろうね？」

私が犯人だつたら殺さない。あんな可愛いものを。

「そうなの。それが謎なの。まあ、気が狂つてんじゃないかしら？」

ふーん。

「私、明日から死体を探してみようと思つた。ついで結構大きいし、校外には持つてかないと思つた。校内に埋めたんじゃないかな？」

「じゃあ、明日は死体探しか。休日だけビ部活ないし。」

「そう言えれば、明日は土曜日か。」

「あつ私駄目だわ。部活があるの。」

「じゃあ私と勇貴か。はー。」

「まあ、簡単に出ないんじやない？」

「うるさい」と優貴は笑つた。

「出なーい！」

太陽がじりじりと頭に照りつける中、シャベル片手に二時間。「優貴の言つ通りじゃない。……帰ろー。」

私は勇貴に言つた。

「確かに出ないな……。シャベルは教室に置いて帰ろー。」

勇貴も諦めた。少しひんやりしている校舎内。部活をしている音が聞こえる。吹奏楽部、合唱部、演劇部……。意外と校舎内で活動している部活は意外に多い。

「俺、優貴迎えに行つてくる。多分部活終わつたと思うつし。シャベル頼んでもいいか？」

返事言つ前に走つて行つちやつた。面倒くさいな……。なんかおひりてもらおう。

扉を開いたら、教室には篠山君がいた。多分部活動中だと思ひ。

「結城さん、どうしたの？ 部活？」

「まあ、そんなどー。」

窓の下を見ると勇貴が走つてた。紫陽花は青色になつていた。

「何縫つてるの？」

篠山君は何かを縫つてゐるようだつた。窓から勇貴はもう見え

なくなつた。

「今度の劇で使う衣装。出演者は自分の分を自分で作らないといけないから。」

「そういえば演劇部だつて？」

「何の役？」

「不思議の国のアリスの白うさぎだよ？」

「うさぎ？」

冷や汗が背中を伝う。とたんに、篠山君の人のいい笑顔が怖くなつた。篠山君が手にしているのは、やけにリアルな白い毛皮。「うさぎの毛みたいね……、その布。」

きつと顔引きつっている。

「そう？ 努力したかいがあるよ？ ベストにするんだ。」

努力つて何の……？ 逃げたい。誰か。

その時後ろの方のドアが開いた。

「花音ちゃん、遅いよ？ 今、勇貴にジュース買いに行かしたから、早く帰りましょう？ あら、篠山君、部活？」

優貴だ。

「優貴、帰ろう。バイバイ、篠山君。」

「え？ 花音ちゃん？」

私は優貴を引つ張つて走り出した。後ろを見ずに。

「……花音ちゃん？」

「篠山君が犯人かもしけないつ。」

校門から少し歩いた所。頭の中が混乱してゐる。しかも逃げてきたし。月曜日どうしよう……。

「あつ！ いた！ お前らどこ行つてたんだよ？」

ジュースを抱えて勇貴がやつてきた。

「勇貴……。」

意味もなく呼んだのは何だらう。

「花音？」

怪訝そうに見てる。

途端、私の頭をくしゃくしゃ撫でた。

「何か、あつたのか？」

心配そうな顔をしている。

私は見たことをそのまま話した。上手く話せない。いつが殺される瞬間を想像してしまつ。

「優貴なんも見てないのか？」

「ええ。」

二人とも腕を組んで考え始めた。鏡に映したみたいだ。

「……、ひとまず帰りましょう。考えもまとまるでしょう？」

優貴の提案で私達は歩き始めた。

「で？ 考えはまとまつたかしら？」

優貴の部屋。勇貴と同じ広さのはずなのにベルサイユ宮殿だ。  
(私の部屋は優貴より半畳大きいはずなんだけどな。)

「やっぱり篠山犯人じやないか？」

それしか考えられないもの。

「でも、死体はどこに埋めたの？」

決定的な証拠よね。

「……やっぱり明日も死体探し？」

ため息が出るけど仕方ない。それしかないもの。

「死体が見つかれば、何か一緒に出てきて篠山君をぶつ飛ばせるものね。」

「ぶつ飛ばすことしか考えてないのね、優貴。」

「じゃあ、お開きね。また明日も頑張りましょ。」

「花音？ ちょいこい。」

優貴の部屋を出たら勇貴の部屋に迷はれた。

「何よ？」

暑いから早く着替えたいベタベタする。

「何かされなかつたか？」

「誰に？」

相手が分からぬから。でも、勇貴の顔は真剣だ。

「あの、何もなかつたよ？ 誰とも。そういうえば紫陽花の色が青に変わつてたんだ。なんでかな？」

変な言葉が口を出た。ああ、なんで紫陽花なんて口走つた！

「……紫陽花の色は土の成分で変わるんだ。アルカリ性ならピンク、酸性なら青になる。」

物知りだな。

「土の成分つてすぐ変わるの？ 昨日はピンクで今日は青になつてたよ。」

「は？ 誰かが炭酸水でも水の替わりにやつたんじゃないかな？」

炭酸水は酸性か。

「……？ ちょっと待てよ？」

勇貴はまた手を組んで考え始めた。何か考えついたのか？

「よし！ 分かつた！」

「は？ え？」

分かつたつて何を？ 犯人？（篠山君か？）

「つさぎだよー・つさぎー・」

なんで繋がるのよ？

「桜は死体を埋めてあるから紅いだろ？」

怖いわよ……。

「紫陽花は死体を埋めると青くなるんだ。」

夜の校舎に忍び込む。ワクワクする響きだけど甘いもんじやない……。（来るためにどんだけ怒られたか。）

「明日でも良くない?」

ため息と共に出てしまった言葉。だつて結構怖い。

「明日も演劇部いるらしいぞ? 篠山が来たらどうする?」「私と勇貴なら花音ちゃんぐらう守れるんじやない? とすかさず優貴。……自分の身ぐらう守れるわよ。

「後ろから、武器持つて襲われたら分からぬ?」

「武器つて……。まあ暑い中やるよりましか。……怖いけど。ガチャヤンヒ音がして優貴が鍵を開けた。

「ちよつと、そんなのどつから持つてきたのよー。」  
きょとんとした顔で優貴は答えた。

「職員室にかけてあつたのをちよつとね。」

手を振つて言つた。そのちよつどが知りたいのよ。

「……我が妹ながらすごいな。」

そこ感心するところじやないよね?

電気は付いてないので懐中電灯を付けた。一人一本。  
「シャベル取りに行きましょう?」

こんなところで、優雅に微笑む優貴はやつぱり、大物だ。

歩く順番は一番が勇貴で私、優貴と続く。

「……階段登ります。」

「はーい。」

小声で確認。

昼間とは違う顔を見せる校舎。昼は優しい感じだけど、夜は冷たい。知らない所みたい。

階段がギシギシなる。埃の匂いがする。

「ねえ? 知つてる?」

優貴が口を開いた。

「この南階段つて、上りと下り段数が違うんだつて。」

勇貴の肩がビクッと震えた。そういえば、勇貴怖い話ダメだつけ?

「うつ嘘だよな?」

「数えてみれば?」

「優貴、意地悪はそこまでにしてあげたら。」

私は優貴にストップをかけた。なのに優貴は

「い、いや数える。」

なんて意地はつちやつてさ。

「…十一。」

上りきった。

「はい。勇貴君よく出来ましたー。」

優貴は幼稚園の先生ですか？

「帰りが十三だつたりして。」

ケロツと笑顔で言わないで。

階段を上がつてすぐに私達の教室がある。優貴は勢いよく音を立てて開けた。

「ほら、早くシャベル取つて？」

……優貴はお嬢様ですか？（私は召し使い？）シャベルを取つて教室を後にして。

ちなみに階段は十三段で勇貴は逃げながら走つた。

「ああ、掘りましょ？」

紫陽花の前で優貴が言つ。紫陽花は青い。

「あつ、こここの土柔らかいぞ。ここか？」

さつきと打つて変わつて、無邪気に優貴が掘り始める。

五分ぐらいかな。勇貴が見つけた。

「あつた……。」

「えつどじじ？」

勇貴の肩越しに見よつとした。

「見ちゃいけない！」

勇貴が叫んだけど遅かつた。私は見てしまった。

皮を削がれ、腐りかけた肉片。悪臭が漂う。

ああ篠山君が皮を持つてたからか。なんて、どこか冷静な自分は考えてた。

だけど次の瞬間。記憶は落ちた。

そつくりな顔が私を覗きこんでる。

「……目、覚めた？」

優貴が聞いた。ガバッと起き上ると私の部屋だつた。あれ？

「勇貴が運んだのよ。」

「……俺以外花音を誰が運べる。」

……悪かつたわね。（四捨五入して五十キロ超えたらダイエツトしよう。）

「うさぎ。ちゃんと埋めた？」

「うん。」

あのままじゃ、うさぎが可哀想だ。

「でね？花音ちゃん、うさぎと一緒にこれも出てきたの。」

優貴は親指ぐらいで長方形で、濃い赤のものを私に見せた。手にすると、委員会の委員長や副委員長、書記や生徒会の人を持つている。（所属）とに色が違う（これには「書記」。色は飼育委員会。書記は二名。

「飼育委員で書記は、私と篠山君。」

優貴は制服を引っ張り出して、襟に付いている同じバッヂを見せた。

「篠山君で決定？」

一人とも二口ッとして頷いた。黒い笑顔で。

学校には校門が開くと同時に「」行つた。篠山君は確かに一番に来てるはず。

勇貴がドアを開けるともういた。

「おはよう。結城さん。」

人あたりのよい顔だけど、私にはとてもない悪者の顔に見える。

「篠山君？ 中庭に来てもらつていい？」

ひょいと優貴が後ろから顔を出して言つた。優貴ナイスタイミング！

「……うん。今行くよ？ ジャあね？ 結城さん。」

篠山君は意味ありげに私の方を見て笑つた。

「あのー？ 僕無視？」

忘れてた。ごめん勇貴。本当に。

「俺らも行くか。」

もちろん。私は勇貴の手を取つて優貴の後を追つた。

「で？ 鈴富さん僕になんのようかな？」

校舎から見えない中庭。ここまで来てしらを切るつもりか。

てか、中庭の大きい木の影で盗み見してる私達はかなり怪しい

……。（誰も来ませんように！）

「私言つたわよね？ うさぎを殺した犯人……。」

優貴はそこで言葉をきつた。どうした？

「オオコオン！」

「ぶつ飛ばしますって？」

壁にぶつかつた篠山君はきょとんとしてる。今の音は篠山君が

突つ込んだ音ね？ 優貴に殴られて。

「俺なんかまだまだ優しくされてたんだな……。」

後ろで勇貴がボソッと呟いた。たまに癌が出来るのはそれが理由ですか？

「勇貴今度何か奢つてあげる……。」

あまりにも哀れだ。

「勇貴に花音ちゃん、いるんでしょ？ちょっと手伝つてよ？」

「え？何を？」

篠山君はロープでグルグル巻きにされてた。三十秒ぐらいで。目を丸くした私達をみて優貴は言った。

「もちろん、埋めるわよ？」

あの後は大変だった。深い穴掘つて、篠山君入れて埋めて。（ほとんどの勇貴だけど）最後に優貴が篠山君の顔に「僕はウサギ殺しだす」って貼り紙を貼つてた。

なんか叫んでたけど、中庭は誰も来ない。しばらく反省してください。

「これで篠山君こりたでしょ？」

優貴は愉快そうに笑う。

「多分劇にも出してもらえないな。ウサギの皮びっすんのかな。」  
と勇貴。

「先生席替え今すぐしてくんないかな……。」

「これは私。だつて前後だし。」

「大丈夫！勇貴になんとかさせるからーねつ？」

「分かってるよ。痛いから！」

優貴に背中を叩かれながら答える勇貴。

これにて事件は解決した。

ちなみにこの事件を小説にしたのが載った部誌は飛ぶように売れ、篠山君は先生達にスッゴく怒られた。そして私達三人（特に優貴）にびびつて暮らしてる。

ではまたの機会まで。

梅雨（後書き）

最後は、ある小説から…  
この間とは違ひ感じです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0373m/>

---

ゆうき

2010年10月14日08時35分発行